

東京石見高山会発足

特集

S 60.11.9

はるかなる

ふるさとの皆さんへ

東京石見高山会

事務局 米原光 謹

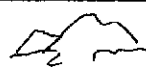
大代の皆さんお元気ですか、今年の初め「ひろば大代」を送って戴き、此の事が契機と成って東京石見高山会を十月六日に発足致しました。

現在九十八名、当日参加者四十名、大代から祝電、橋本公民館長様を初め三名の御参加を戴き、ふる里の現況、力強い励ましのお言葉を頂戴致し、其の上高山の額入り写真等を記念品として戴きましたこと、改めてお礼を申し上げます。

春日先生を初め懐かしい大勢の皆様にお会いする事が出来、懇親会ではカラオケ等で盛り上がり、和やかさのなかに感動的な発会式と成りました。会長さんには名実共にすばらしい人徳の有る渡俊則さんに就任して戴きました。

た。私共は会長さん中心に都会に出て居る者同志、又都会と郷土の皆様との連帯感をなお一層深め、御期待に添えるべく頑張つて参り度いと思つて居ります。

毎年秋総会を致します。日程に合わせて東京見物を兼ね御参加下さいませ。様お待ち致して居ります。発会式の御報告とお礼を申し上げ郷土の皆様のお多幸を心からお祈り申し上げます。



「人材養成の港」

香 田 行 雄

「四十六年前の春、私ははじめて、大家高山が仰がれる大家村小学校の桜の下に立ちました。受持ったのは五年生の男子十一人と女子十六人。この東京石見高山会にも、その中の九人の方が出席しておられます。実は昨日、横浜の私の家で同窓会を開いたからであります。私たちはこの五十年ちかい年月の間、兄弟のように、お互いに不遇な時も、励まし、慰め合つてきました。この事実だけでも、あの高山のふもと

の大家、八代の人々のあたたかい心が証明されると思います。わずか七か月

しか勤めなかつた私を、こうしてこの席にお招きいただき、有難うございました。」

十月六日午後、東京の総立総会で、私はこう挨拶した。

「明円寺のサトリちゃん」小笠原恵利住職、「橋本屋のショウちゃん」橋本昭二社長・公民館長、「藤井のフーちゃん」房子先生、それに当時六年生だった「熊本のマーちゃん」熊谷真智枝先生はわざわざ大代から来て下さった。大阪からは「後藤サツキちゃん」。そして東京で準備して下さった二人の「光ちゃん」米原光義社長と山根光雄さん、「山口のクニちゃん」は今、那須久仁子夫人、そして今月、三菱重工業・横浜造船所づとめ三十六年を完遂した窪田忠雄さんである。

「当時、福岡最先生や長廻俊先生とここは「山の港」だといっていました。が、今日ここではじめてお目にかかるみなさまのご活躍ぶりを承わつても、大代は「人材養成の港」であることが確認できます。」と、私は結んで、はるかに大代の里のご繁栄と、みなさまのご健康をおいのりした次第である。

かふるさとに想う

横浜市 窪田 忠雄

ふるさと、何んとよいなつかしい言葉だろう。自分たちが生まれ育ち学んだところであり帰れば友達も居り小さい頃は大宮の境内から豊川の先まで、はては城山の麓まで勉強もしないでよく遊びに歩いたものだった。

今では城山を一周できる麓の道も分からぬ程草が生え、人々が汗を流して越えた峠道も草だらけで歩けなくなっているのではないだろうか。

その頃祭のミコシについて歩く子供らの数は相当なものだった。戦后復員などで若い人も大勢居りその年の秋祭は食糧難とはいえ、賑やかだったのをおぼえている。それから生活の為都会に働きに出る人で一人減り二人減り私もその内の一人だったが正月や盆と祭にはふる里を思い一度は帰省した。

東京オリンピックの年、長男が幼稚園で秋祭に帰り校庭で運動会があり、ハリコゴジラを見たが私にとってはふるさとはまだ近くよき時代と思っっている。このなつかしい時代が再びかえ

ってくるとは考えられないが過疎地を守り生活しておられる先輩や友達そして後輩の方々に心から感謝しています。

どうか体には十分気をつけ働いて下さい。親たちが育つたふるさとを思い慕う子供たちが一人でも多く育ちます様に。そして私等都会に住む者は手を結びふるさとをもっと近いものにしなればならないと思っています。

友と葡萄酒は古いほどよい

「東京石見高山会」に出席して

運営委員 藤井 房子

「まあ、先生分かりますか。」

「あ、朋ちゃんですね。」

出合いのご挨拶どころではありませんが。雨の中足も軽く、築地本願寺会場へと急いだ十月六日、正後の光景です。

東京近郊在住の大代町出身者を会員とする表題が結成され、その式典に来賓として、大代公民館長の橋本さん外五名が、列席させて頂きました。

渡俊則様が会長、事務局長には植松出身の米原光義様が就任されました。

役員の方の挨拶に、大代出身者が集い、どの会よりも喜ばしい。今日、中

央で、我々が活躍できるのも、大代を過疎に追い込んだ責任が有ると思う。できるだけの援助をするので、郷里の方も頑張つて欲しい。産業を盛んにして、産物を送るなりしてくれるなら、協力したい、等々の温かい言葉も聞かせてもらいました。

年一回の総会に、今後、多数出席して欲しい。

橋本館長が、祝詞で、大代の現状を話され、「郷里を一層、身近に感じた」と出席者がとても喜んで下さいました。祝宴では、カラオケ等も有りました。全会員が、「下市、渡俊則」と名札を付けた上に、ユーモアたっぷり、「八反田の林つまちゃんの三男です。」と美男の林君の自己紹介があつたりしてとても、和やかな会でした。

終始、大代の盆踊り、田植え囃、神楽のくどきもテープで流され、最後には、肩を組んで、「ふるさと」の斉唱をし、胸が詰まり、声も絶えがちでした。

延長二時間、再会を約束しながら、雨の中、夕暮れの会場を後にしました。が、とても有意義な半日でした。